



淫縛ノ巫女
犀星編



男の名は宗谷 遥殷（そうや よういん）
国随一の神通力を持ち
その力を帝に認められ直属陰陽師として
都でその権力を振るっていた

その昔
強大な力を持つが故に
愚行にはしった男がいた

神通力と権力、この二つで彼は
手に入れたいものを手に入れ続け
その欲望を肥大化させていったが
神通力を用いようと権力を振るおうと
手に入らないものがあり
それが後に彼を凶行へと走らせる

女の名は篝 犀星（かがり さいせい）
遥殷に勝るとも劣らない神通力を持ち
こちらも帝にその力を認められていたのだが
俗世に興味の無い彼女は都に住まう事を断り
都から離れた生家で自由気ままに生活していた

同じモノを見ることが出来る犀星を
遥殷は自分の伴侶として迎えようとするが
彼女はそれを拒否
遥殷は権力を振るい彼女の家に押しかけたり
呪術の類で彼女を手に入れようとしたが
彼女にはそのどれもが通用しなかった

肥大化していた欲望は
手に入らないストレスにより
それは肉欲となり彼は帝の娘に
手を出してしまう
それを知った帝は激しく怒り
遥殷を光さえ届かない岩穴へ
閉じ込め餓死させるといふ
最も過酷な死罪を与える
普通の人間ではそこで
餓え死ぬのを待つしかないが
遥殷は自らの肉欲と力を暴走させ
モノノ怪転身という最悪の方法で
岩穴を抜け出すのである・・・



陰陽師

箒 犀星（かがり さいせい）

来たか……
遥胤

モノノ怪となったモノは
生前の負の感情・怒り妬み
それらのなかで最も強い感情が
行動原理になり全てとなる

遥殷がモノノ怪に墮ちる前に
抱えていたものは
犀星の全てを欲したいという
「肉欲」



何故だ犀星！
俺はお前を正妻に
迎えたい！

だがお前は
何度もお前の社に足を運ぶ
俺の求婚に一切耳を
傾けようとしな！

遥殿、今やお前は
帝の側近である
宮廷陰陽師だ

私でなくとも
伴侶など選り取りみどりであろう？
私に拘る必要もあるまい

お前でなくては駄目なのだ！
同じ力を持ち同じモノを
共に見ることが出来る
お前でなくては・・・！

犀星！

すまんが興味が無いのだ
お前なら私より
もっと良き伴侶を
得る事ができできるさ

・・・まったく

モノノ怪と成り果てた今も
私を欲し続けているとはな・・・
・・・正直悪い気分ではないぞ
遥殿よ・・・

急急如律令！

カ

・・・けて

！

たす・・・
けてえ・・・

しかしモノノ怪は靈魂の類に近く
生殖能力などはもちろん無い
いくら相手を犯そうと
決して達することは出来ない

あああ・

助けて・
たす・けてえ・

ひっ・
いやあ・

んっ！
あんんっ！

っ！

ああああ！
誰・か
助け・

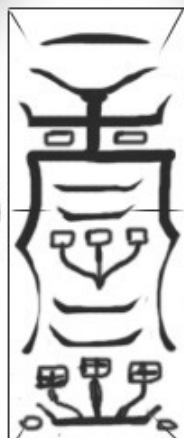
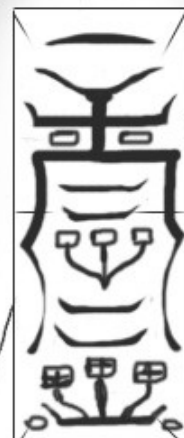
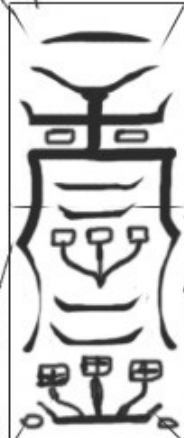
だがそれ故に決してその肉欲は
収まることはない
相手が果てるまでその行為は
終わる事はないのだ

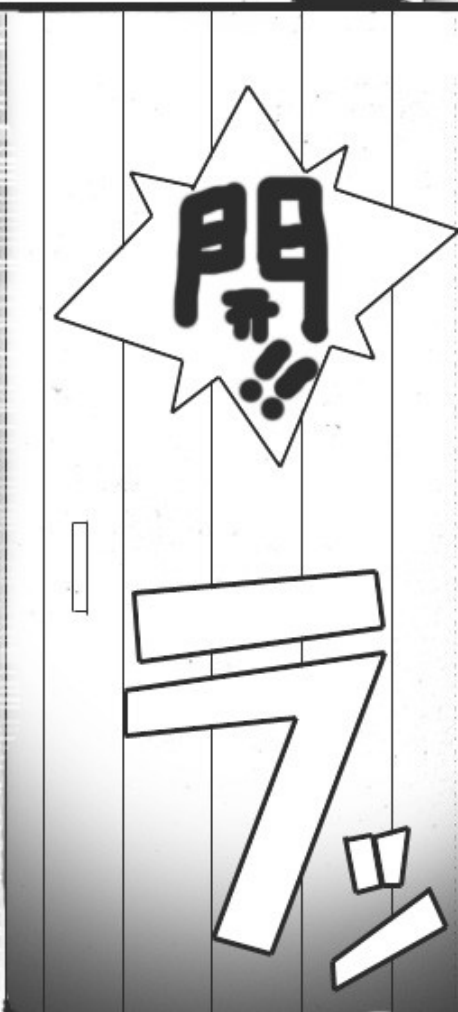
ズボ

遥殷・・・
此处に来るまでに

一体何人の
女を喰ろうて
きたのだ！

縛





これは純度の高い
玉鋼の原石に
我が一族が靈力を
注ぎ続けてきた
この国に二つと無い
「鏡石」

ギィ

なっ！

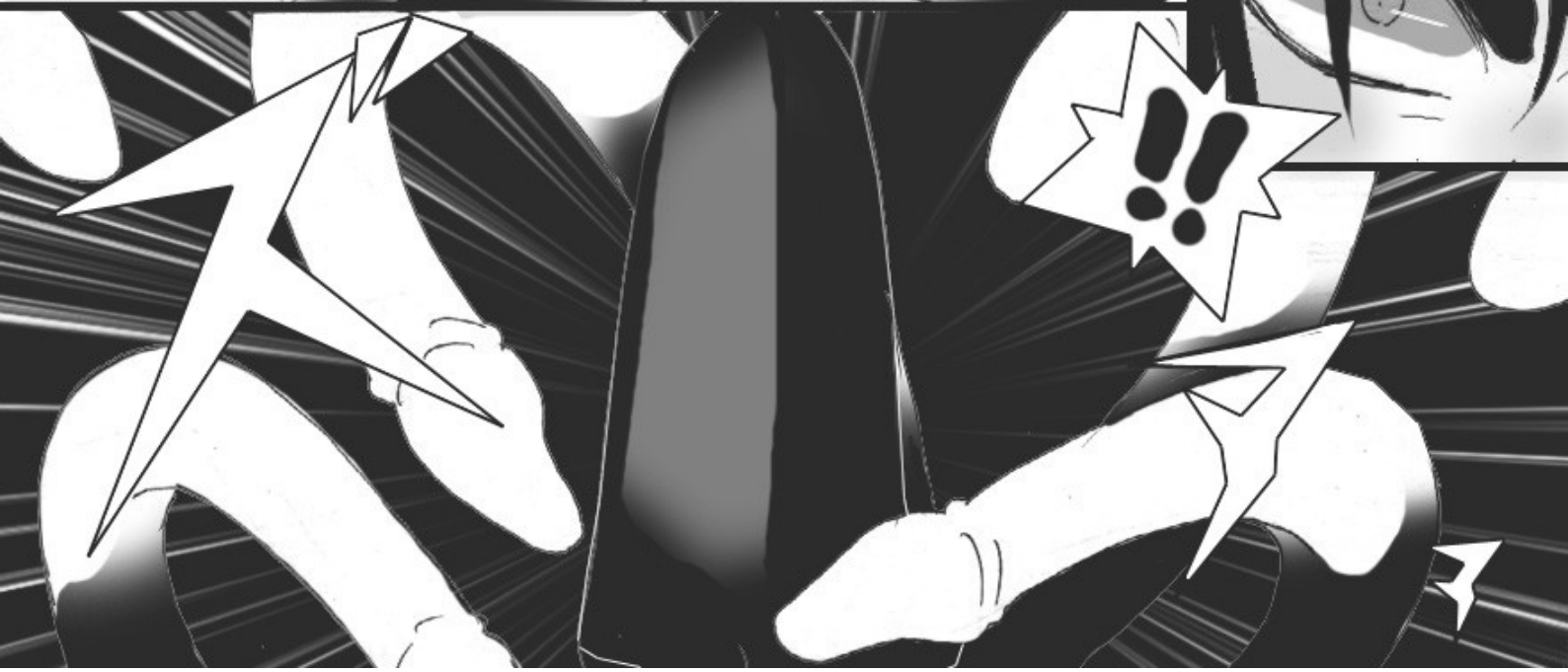
馬鹿なっ！
三式破邪の印を
こんな短時間で破るだと！

これを用いお前をこの地に
封印する・・・遥般
お前の望み通り私は生涯
お前の傍に寄添おう・・・
その穢れた魂を浄化するのだ



見誤った・・・
まさかこれほどの力を
有していたとは・・・！！

こうなったら
私ごと遥殿を・・・
！！



う・・・

いっせ・・・

そうか・・・
遥殿の中
・・・か



うぐっ！

手足の感覚はある
ということはこの腕は
喰われたというわけでは
ないとうだな・・・

しかしこれでは
ここから出ることは
困難・・・

クスッ

クス・・・

！

グッ

なっ！

ズッ



聞こえるのじゃ・

!!

お前を快楽により
狂わせることができれば
ここから出してくれると
頭の中に声が響くのじゃ

！その眼は
お前達の御魂は
既に・

あぐっ！

ちゅ

あつ……あつ！
やめ……ろっ！

ちゅ



ここで受ける快感は
通常と比べ物にならない程に
体が敏感に感じ取るのだ

チュ

ピュ

あま...?

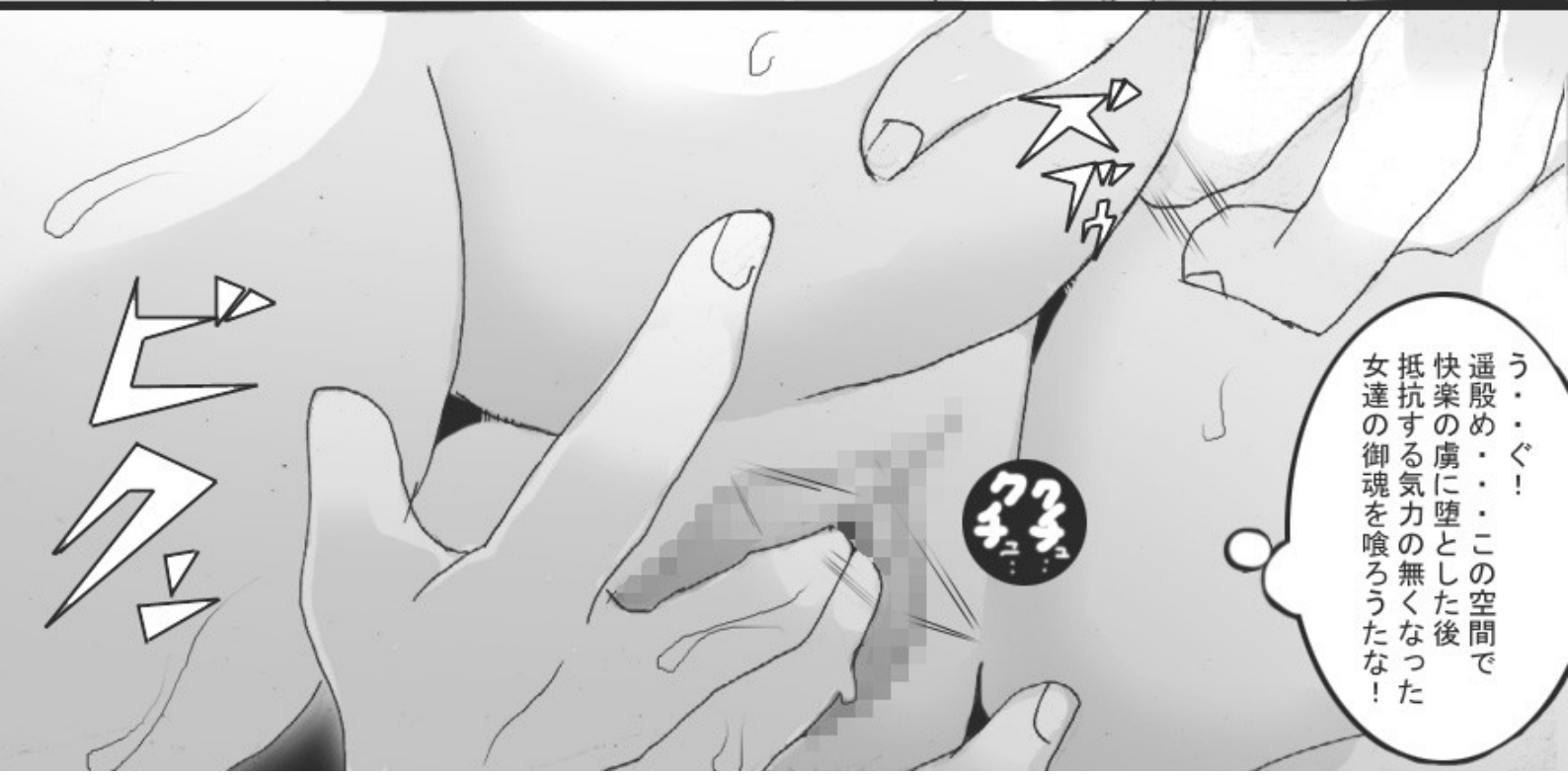
我らがこの中で
受けていた恥辱を
お前にもたあっぷり
味あわせてやろう...



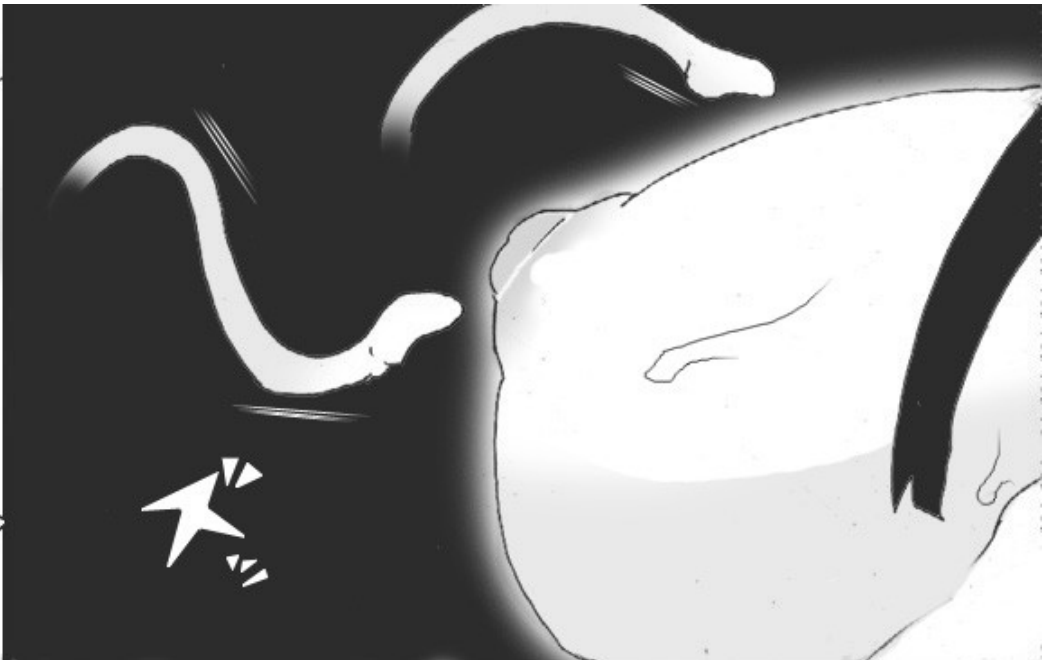
まずい・・・！
この女達の言うとおり
遥般の中では体の感覚が
おかしい・・・！！



この女達の眼・・・
間違いなく遥般に
御魂を喰われ彼奴の
傀儡と成り下がっている



う・・・ぐ！
遥般め・・・この空間で
快楽の虜に堕とした後
抵抗する気力の無くなった
女達の御魂を喰ろうたな！



このモノノ怪は
母乳を吸るのが好みなのじゃ・・・
妾達も皆この触手に乳腺を弄られ
乳を垂れ流す乳房にされてもうたわ

中?!!
どっか

ズボン

おっおっ!!

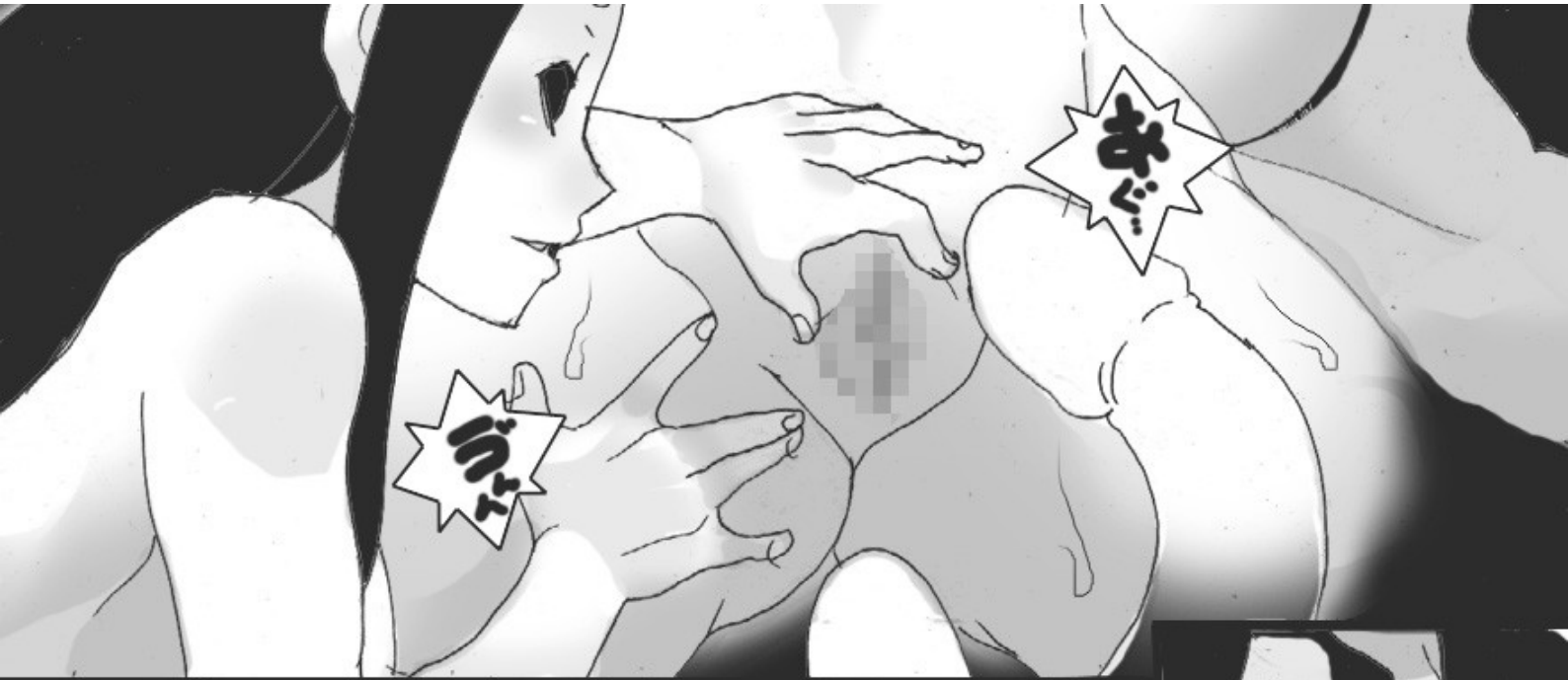
痛くはあるまい?
不思議なことにむしろ
だんだん乳首を穿られる事が
気持ちよくなっていくぞえ



私もこの女達のように
遥般に御魂を喰われ
傀儡と成り下がり

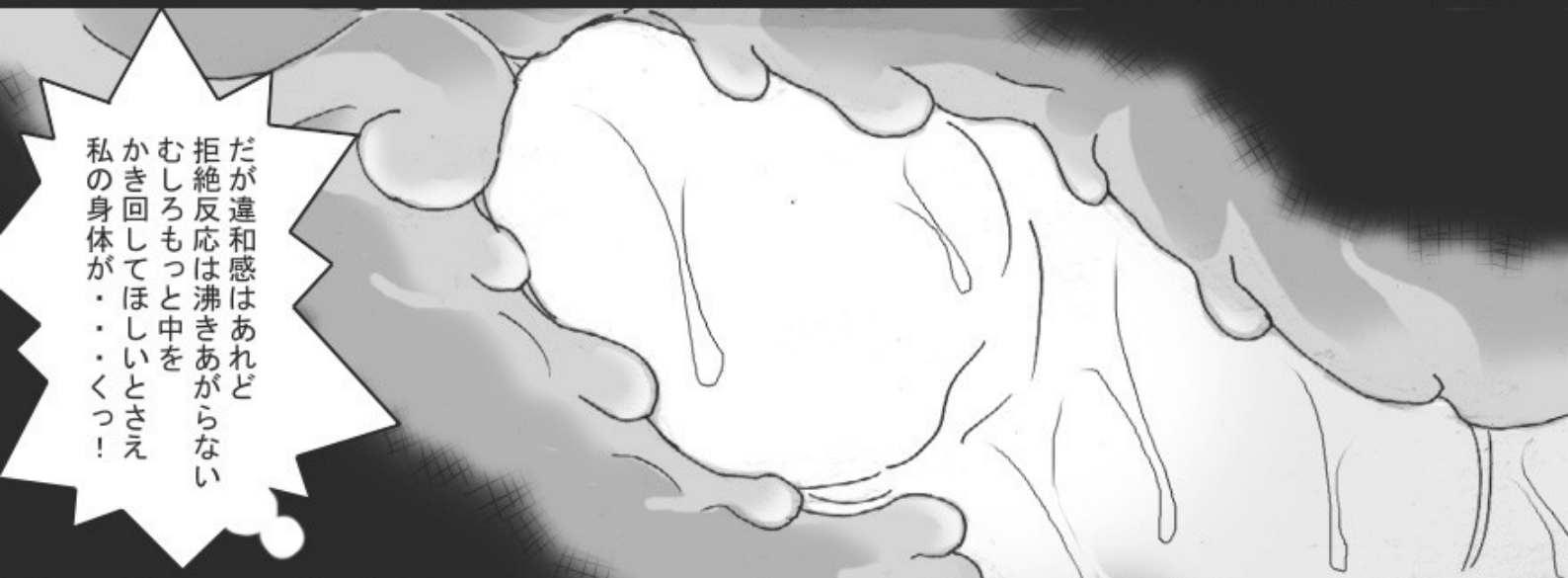
この空間で永遠に
身体を弄ばれ
続けるのか・・・？

クス・・・
お前も私達と同じ
乳房だけで達して
しまったようじゃなあ？





う・ぐ！
身体の奥を遥般に
弄られているようだ・・！



だが違和感はあるけど
拒絶反応は沸きあがらない
むしろもっと中を
かき回してほしいとさえ
私の身体が・・くっ！



いかん・・駄目だ！
気をしっかり持って
耐えよ！

あが
あが

ズ
ズ

ズ
ズ

ズ
ズ

に、二本の触手が
中で擦りあつ……
ぐううう！

グ
グ

う
う

ゴ
ゴ

ゴ
ゴ



身体をどう翻られようと
全てが快感になって
私の全身を駆け巡る・・!



お・・・

おんんっ！

まだ堪えてるようじゃが
乳首から三本の触手が侵入し
乳腺を壊されているというのに
このとろけ顔・・・



んっ！

ふう、ん！

思考と感覚が混濁し
理性が快楽という本能に
塗り固められるのも
時間の問題よ・・・



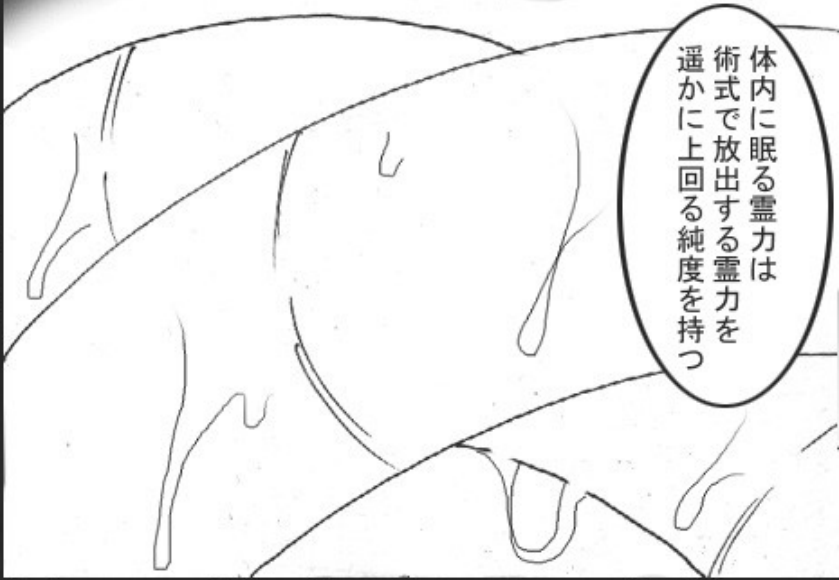
？

そうすればようやく
妾はこの空間から
出ることが・・・！

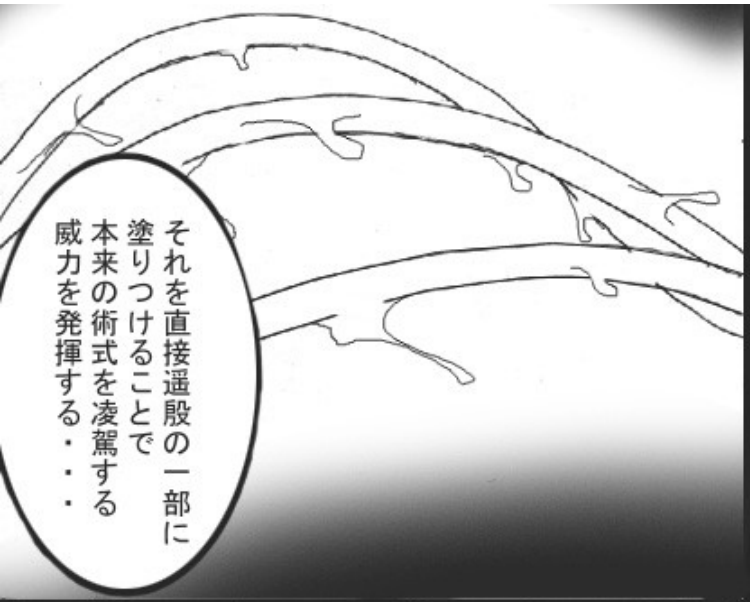
ぽろ

ぱっ





体内に眠る霊力は
術式で放出する霊力を
遥かに上回る純度を持つ



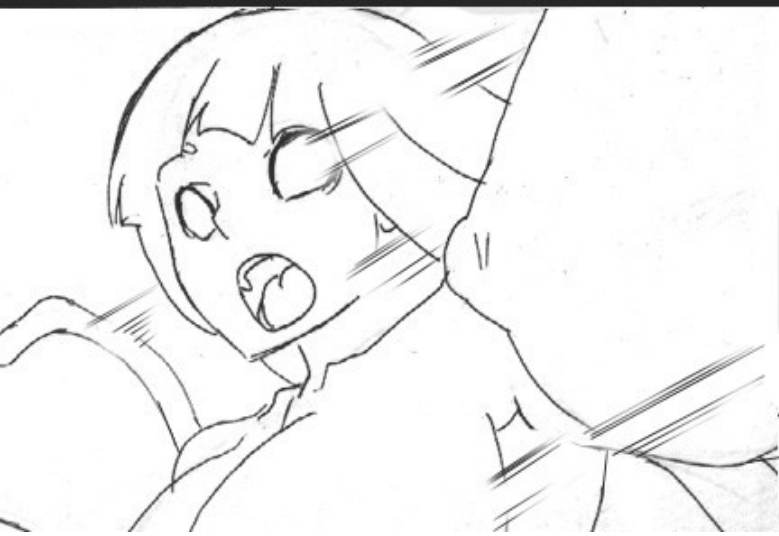
それを直接遥般の一部に
塗りつけることで
本来の術式を凌駕する
威力を発揮する・・・

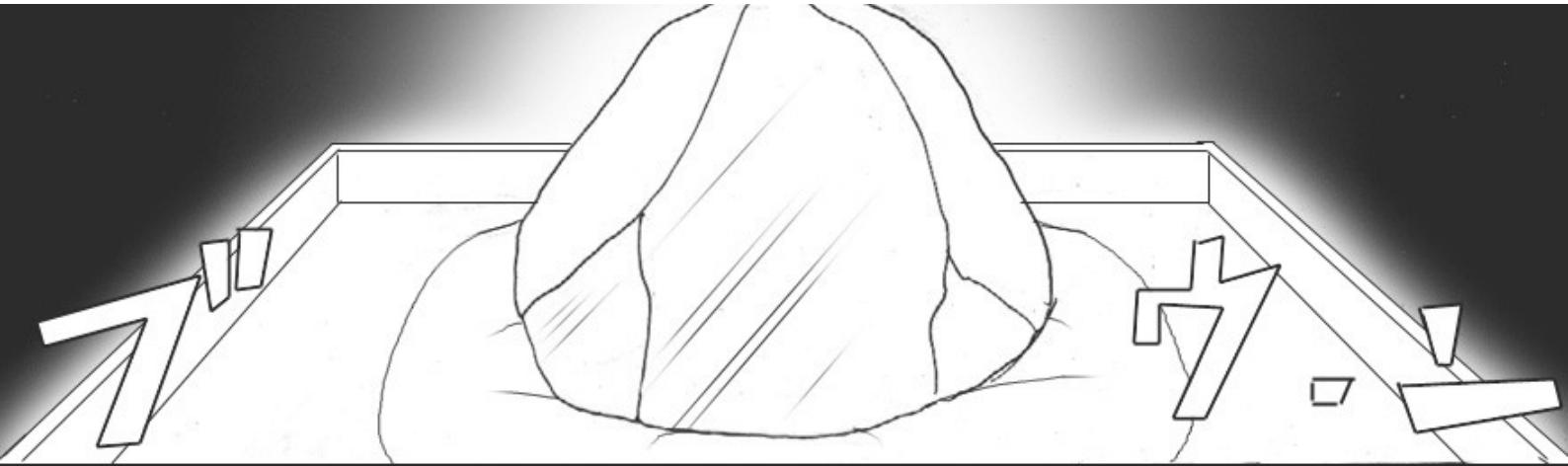


光に導かれ
穢れてしまったその御魂を
洗い清めよ！



文字通り奥の手だ！
私がお前達を
ここから開放してやろう！





たーんと
お飲みよ

すまないな・・・おかよ
こんな事を頼める知人が
そなたしかいないものでな

いいんですよ、犀星様
犀星様には風水術で
作物を育てるのに適した場所や
水源を探し当ててもらったりして
村はいつも大助かりしてるんだから

それにしても犀星様
水臭いじゃないですかあ
いつ祝言あげたんですかあ？

こんな可愛い女の子もいて
一言言ってくれれば
お祝いに行ったのにー

祝言はあげておらんよ
旦那となる殿方もいない

遥殷の力は
彼女の想定を上回る
ものだった

え？
じゃあこの子は……

ああ
その子は私の娘だ
正真正銘な……
少々訳ありなのだ

かろうじて遥殷の中から脱出した犀星は
鏡石で遥殷を封印する事に成功はできた
だが……遥殷の予想以上の力に
犀星は鏡石の霊力だけでは
いつまでも封印できない事を悟っていた

封印を護り続けるには
鏡石の霊力が無くなる前に
再び霊力を蓄えさせるしかない
それは封印を最小限まで弱め
鏡石に霊力を蓄えさせる
余力を与える必要があった

だがそれでは
弱まった封印の間を縫って
遥殷の一部が這い出でて
再び人を襲うのは目に見えている

犀星は遥殷が自分を
優先して襲うことを見越して
知り合いの祈禱師の男に事情を説明し
二つ協力してもらうよう取り繕った

一つは失った鏡石の霊力を
再び蓄えさせるために
自分の後継者へ彼女達に
協力するよう伝えてゆく事

もう一つは後継者へ
彼女の子孫に自分達の
精を注ぎ次代の巫女を
育ませ続けるという事

犀星はまず自らが子を孕む前に
遥殷が常に自分の「存在」を
追い求めるよう自分の身体に
女しか産めない呪いをかけていた
その呪いは彼女だけではなく
彼女の子孫へと受け継がれる程
強力な呪術である

さらに遥殷の中に
一度完全に取り込まれたことで
彼女は遥殷を強く感じ取れる
一種の呪いのようなものが身についてしまい
これも子孫に受け継がれていくほどに
強力なものであった

犀星はこの二つの呪いを利用し次代に
自分を取り込まれた時に使った撃退法で
封印の間から出てきた遥殷の一部を退けさせ
鏡石の霊力が回復するまで
封印をもたせようと画策したのだ

所詮人の身である私には
時間も力も限られている
いつか奴を滅する事が
出来る人間が現れるまで
私は次代に託すしかないのだ

託すしか……
ないのだが……

おかよ……

はい？



私は今
どんな表情を
しているかな・

自らも少なからず
原因の一因だったことに
責任を感じた犀星は
生涯、遥殷の相手をし続け
次の世代に託していった

しかしその後も
遥殷から身を隠すための道具が
少数造られた程度で
このモノノ怪を屠る手段は
一向に見つからず
時だけが流れていき・



そして現在・
未だに犀星の血を継ぐ娘達が
その身体をモノノ怪に穢されながら
鏡石の封印を護り続けている

